

平成20年度 大学院工芸科学研究科 秋入学宣誓式

学長告辞

本日、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科に入学された博士前期課程24名、博士後期課程13名の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表して心から歓迎の意を表します。今日、研究者、高度技術者を志向する若い新しい力を迎え入れることができたことは、京都工芸繊維大学にとって、大きな喜びであります。

皆さんは、学部や博士前期課程で身に着けた知識や能力をもとに、これからは、より高度な研究に取り組まれることになります。そこで、まず、本学の基本理念の中で謳っている教育研究の指針を紹介させていただきたいと思います。

京都工芸繊維大学の特色は、伝統文化の源である古都の風土の中で、知と美と技を探究する独自の学風を築きあげ、学問、芸術、文化、産業に貢献する幾多の人材を輩出してきたことにあります。その歴史を踏まえ、社会的な要請に応えて更なる発展をする礎として次の三つの指針を掲げています。

第1は、「人類の存在が他の生命体とそれらを取りまく環境によって支えられていることを深く認識し、人間と自然の調和を目指す」ことです。

第2は、「人間の感性と知性が響き合うことこそが、新たな活動への礎となることを深く認識し、知と美の融合を目指す」ことです。

第3は、「社会に福祉と安寧をもたらす技術の必要性を深く認識し、豊かな人間性と高い倫理性に基づく技術の創造を目指す」ことです。

本日入学された皆さんは、この教育研究の指針をよく理解し、これからの本学での研究活動の道標としていただきたいと希望いたします。

指針の2番目に「人間の感性と知性が響き合うことこそが、新たな活動への礎となることを深く認識し、知と美の融合を目指す」と謳っていますが、これは、知と美の融合を目指す本学の教育研究を達成するためには、人間の異なる能力である知的能力と感性的能力の協調的涵養が大切であるということを表明したものであります。今日は、このことの背景についてお話をさせていただきます。

人がそれぞれの立場で課題を解決し、物事を達成していくためには、様々な能力が必要であることは言うまでもありません。

しかし、知識基盤社会といわれる現代の社会においては、その中でも特に知的能力の涵養がもっとも重要であると考えられています。これは、優れた知的

能力をもった人が、現代の社会生活において多くのことを成し遂げることができ、可能性が高いという考えに基づくものです。学校では、この視点に立ち、知的能力の涵養に重点を置いた教育が行われています。しかし、人間の能力は多次元的であり、社会生活においては他の能力も重要であることは古くから知られているところであります。

最近、その中でも感情的知性が、人間相互のコミュニケーションが大きな役割をもつ現代の社会生活ではとくに重要であると言われています。

心理学者の Peter Salovey と John D. Mayer は、1990年に感情的知性 (Emotional Intelligence) という概念を提案し、現代社会におけるその重要性を強調しました。そして、科学ジャーナリスト Daniel Goleman が、1995年に、「Emotional Intelligence」(日本語邦訳では「心の知能指数」) という本を出版し、その中で感情的知性が個人や社会に大きく貢献すると強調したことは、感情的知性という概念が広く社会に流布する契機となりました。

1997年には、Bar-On が感情的知性を測定するための方法として、その数値化を試み、感情指数 EQ を提案しました。また、様々な分野の人々が、感情的知性または感情指数が個人の成功を予測するのに重要であるという主張をしました。

最近では、入社試験にこの評価項目を取り入れる企業が多くなっているようで、就職活動をする学生諸君にとっても注目される事柄となっています。

感情的知性とは、様々な感情の意味、感情の関係を認識し、それらに基づいて理性的に判断し課題を解決する能力と定義されています。そして、感情的知性は、感情を知覚し、感情とそれに関係する情緒 (フィーリング) を同化させ、感情のもつ情報を理解し、感情を管理する能力を指します。

具体的な技能としては、思慮深く感情を調整する技能、感情を理解する技能、思考において感情を同化する技能、感情を知覚する、また表現する技能を含むものとされています。自分及び相手の感情を適切に理解し、互いに助け合う関係性を築けるような力と言えます。この感情的知性は、組織で他人と協力しながら仕事をする場合には、極めて重要です。従来は、感情は、日本では特に人前では抑えるべきものとされてきましたし、それが知性であるとは考えられてきませんでした。しかし、感情が人間にとって何なのかを突き詰めていくと、それは、環境の中で適応的に存在するための洗練された仕組みであることがわかってきたのです。

感情とは、自律反応などの身体反応、認識、そして意識的気づきを含む多くの心理的サブシステムを調和させる内的な出来事です。感情は、典型的には、

周りとの関係の変化に対する反応において生じるものです。その人の記憶との関係、家族との関係、あるいはその人の属性のすべてとの関係が変化した時、その人の感情も変化します。このように、感情は関係性を探知しますので、感情は関係性の意味を我々に伝えることができるのです。感情的知性は、感情の与えてくれる情報を旨く処理することによって、環境における関係性を適切に保つ能力なのです。

本学の理念に述べている指針では、「人間の感性と知性が響き合うことこそが、新たな活動への礎となることを深く認識し、知と美の融合を目指す」ことを謳っております。ここで感性とは、人が世界や外界の事象（もの・こと・情報）に感覚というフィルターを通じて出会い、関係性や意味性を生み出し、創造性を展開していく能力です。この関係性や意味性は、感情によって我々に伝えられ、直感的かつ統合的に捉えられます。

従って、感性の涵養ということは、感情的知性の涵養につながるのです。本学の理念の背景には、人間の異なる能力である知的能力と感情的知性の能力の協調的涵養がこれからの社会を生きていく人々にとって大切であるという認識があるのです。

本日入学された皆さんには、本学の理念に示している本学の指針とその背景を十分に認識され、これからの数年間の研鑽を通して生涯に亘って創造的な仕事を可能とする礎を築かれることを希望します。
皆さんの大学院生活が実り多いものであることを期待して私の式辞といたします。

平成20年10月2日
京都工芸繊維大学長
江島義道